

マイノリティの子ども・若者の学力保障と進路保障 — イングランドでのフィールドワークに基づいて —

Securing Academic Achievement and Transition for Minority Children and Youth
Based on a fieldwork in England

山口真美・瀬戸麗^{*(1)}・王一瓊^{*(2)}・ハヤシザキカズヒコ^{*(3)}

Manami YAMAGUCHI・Rei SETO・Yiqiong WANG・Kazuhiko HAYASHIZAKI
(心理子ども学科子ども専攻)

要 約

本稿では、イングランドにおけるマイノリティの子ども・若者の学力保障と進路保障について、事例を通じてその実相を描く。具体的には、ロンドンにある6つの学校、2つのユースワークで行ったフィールドワークの結果を報告する。調査からは、行政関係者、学校関係者、ユースワーカーやチャリティの運営者という子どもをとりまく人々の日々の地道な努力が成果となっていることが伺われた。

キーワード：イングランド、マイノリティ、学力保障、進路保障

[Abstract]

Based on their research visit to 3 boroughs with high levels of deprivation in London, the authors examined methods of securing academic achievement and successful transitions for minority children and youth in England. The authors focus on the supportive systems and practices found in six primary and secondary schools and two charities offering youth services in the boroughs. The authors demonstrate, by describing the staff's day to day efforts to support and help their pupils and youth, that their work is making a clear difference.

keywords: England, Minority, Securing Academic Achievement, Securing Transition

1. はじめに

1. 1. 研究の背景

本稿の目的は、マイノリティの子ども・若者に対するイングランド⁽⁴⁾における学力保障と進路保障について、8つの事例を通じてその実際と課題を描くことである⁽⁵⁾。

「マイノリティと教育」という研究領域は日本では相対的に関心が薄い面があった(志水ら2014)。近年日本で「教育格差」ということばが普及し「生まれ」(出身家庭の社会経済的地位な

どの社会的属性)によって人々が得られる教育達成に差があるという理解がようやく共有されるようになってきた。社会のなかに存在しているマイノリティグループはマジョリティに比して「教育における排除」に遭いやすい。教育における排除とは、教育からの／教育のなかの／労働市場からの排除のアスペクトを持つ(志水 2022)。ここでは想像しやすい狭義の学力に着目して話を進める。学力獲得は進学や就職の有利・不利に結びつく。それゆえ学校では「すべての子どもがもつ、確かな学力を獲得する権利を実現させること」(志水 2020 p.37)つまり学力保障⁽⁶⁾という観点が重要である。その際には家庭や地域にさまざまな課題があり、それらが学校生活での課題として表出する可能性の高いマイノリティグループの保障に焦点が当てられなければならない。また社会システムの一部である学校教育システムは子どもたちをその先の別のシステムに送り出す機能を持っている。学校中退や教育からの早期離脱を防ぎ高校・大学への進学や安定した就労への橋渡しを行う進路保障⁽⁷⁾という観点も重要である。

本稿で取りあげる英国では 20 世紀末頃に社会的排除／包摂の概念が受容され、特に 1997 年から 2010 年にかけての労働党政権下ではマイノリティグループの社会的包摂を目指した政策が採られた。その後の政権交代により保守党(連立)政権下ではそうした潤沢な予算は確保されず、様々なサービス・支援は縮小されているものの、英国の事例から学ぶところは大きいと考えられる。

1. 2. 英国の学校教育とマイノリティグループの現状

ここで英国・イングランドの学校教育に関する一般的な知識と本稿で言及されるマイノリティグループの現状について簡単に共有しておきたい。

イングランドでは 5 歳から初等教育 6 年間、前期中等教育 5 年間となっている。前期中等教育修了時に、中等教育修了一般資格試験(GCSEs)を受ける。その後の進路は継続教育機関(37%)、シックス・フォーム(38%)、シックス・フォーム・カレッジ(11%)、見習い生・就業(7%)等となっている(菊地 2021, 数値は 2017/2018 年度)。この時点で、大学進学に向けて勉強するか、職業専門学校に進学するかに分かれる。大学へと進みたい場合、A レベルと呼ばれる資格試験⁽⁸⁾を受ける。

本稿で念頭に置いているマイノリティとは、低所得者(貧困)層、エスニック・マイノリティ、障害者である。まず低所得者層に関連して英国では貧困研究が盛んになされ「子どもの貧困」についてもいち早く研究が蓄積されそれを反映した政策が実施されてきた。ただし英国の子どもの相対的貧困率は OECD 平均を上回っており、芳しい状況ではない。2020 年 3 月時点で約 430 万人が該当し、これは約 3 人に 1 人の割合である。また 2012 年と比較してその数は約 70 万人増加している。教育現場においては低所得家庭等の理由に該当する場合に受けられる無料学校給食(free school meals: FSM)の制度がある。これを受給している／いたことを一つの指標として、様々な成果における格差の有無が検証されている。また過去 6 年間に FSM の受給対象であることのほかに、社会的養護のもとにある子ども等を含めた不利な状況にある子ども(disadvantaged pupil)という指標が用いられることもある。英国政府によると 2021-2022 年の FSM 児童生徒は 22.5%、約 190 万

人弱に上る (DfE 2022a)。2017-2018年には約13.6%、2020-2021年には約20.8%であったことを鑑みると対象者は増加してきており、コロナ禍の影響がひとつの理由として考えられる。

次に、エスニック・マイノリティについて。ここでいうマイノリティは、ホワイトブリティッシュ以外の背景を持つ場合である。2021年の国勢調査（イングランドとウェールズ）によれば、大まかなエスニシティの割合は、ホワイトが81.7%、ついでアジア系が9.3%、ブラック（4.0%）、ミックス（2.9%）となっている。2011年の国勢調査と比べると、ホワイトブリティッシュは80.5%から減少しており、「その他」のエスニシティに分類される人の数は約33万人から92万人へと増加している (GOV.UK 2022)。全体としてますます多様化が進んでいると言える。学校教育では、単にエスニック・マイノリティであるかではなく、英語を第1言語としない子ども、つまり英語を追加言語とする (English as Additional Language : EAL) 児童生徒が支援の対象である。これは言うまでもなく、英語を教授言語としている公立学校においては英語の習得度が学力獲得に大きな影響を及ぼしているからである。2021-2022年現在、児童生徒の34.5%がエスニック・マイノリティであり、EAL児童生徒は19.5%で、どちらも増加傾向にあるという (DfE 2022a)。

最後に障害のある子どもについて。英国では、障害を学習上の困難と位置付ける特別な教育的ニーズ概念が導入され、特別な教育的ニーズを持つ (special educational needs : SEN) 子ども、もしくはSEND (SEN and Disability) という表現がなされる。特別支援学校も存在するが、一般の学校での包摂も進んでいる。英国教育省 (DfE 2022b) によると、2022年時点でSEN生徒は16.5%、約149万人である。SEN生徒の割合は労働党政権下の2010年頃に20%を超えたあと2016年まで減少傾向にあったが、近年再び微増している。

なお、各学校の各種全国テストの結果、Ofsted (学校査察) の結果、財政情報が政府のウェブサイトにも公開されており、そこから検索ができる (2023年1月現在)。イングランドの場合、たとえばGCSEsについて、その学校と地区 (地方当局) やイングランドの平均点と比較することはもちろん、EAL生徒や不利な状況にある子ども、性別など、生徒の属性ごとの平均点の差も掲載されているため、学校が学力格差の是正に寄与しているかを確認することができる。また、学校情報としてSEN生徒、EAL生徒、不利な状況にある子どもの数も基礎情報として掲載されている。公開性が保たれているが、学校に順位付けをするというよりは、学校がおかれた社会経済的背景を十分に考慮し、通過率 (一定成績以上の割合) を重視する姿勢が貫かれている (ハヤシザキ・岩槻2015)。

最後にコロナ禍の学校教育への影響について述べておきたい。英国では、2020年3月20日から6月、2021年1月から3月の2回の学校閉鎖が行われた。どちらもロックダウンの措置に合わせたものであった。政府主導で学校閉鎖が決定されたのは、学校経営を自律的に行っている英国では前代未聞のことであったという。学校閉鎖以後、児童生徒の学習機会の保障やウェルビーイングの充実に向けて、社会経済的な格差や特別な教育的ニーズがある児童生徒への対応、児童生徒・教職員のメンタルヘルスへの対応が重視され、様々な対策が取られている。この際、社会経済的に不利益

な家庭の児童生徒に着目し、重点的に国から学校への追加予算が配分された（植田 2022）。本稿では、このようなコロナ禍の影響が、マイノリティ性を持つ児童生徒が多くいる実際の学校・支援機関でどのように表れたのか、どのような困難と対応があったのかについても着目していく。

1. 3. 研究の方法と訪問の経緯

英国での調査経験が豊富なハヤシザキを中心に、マイノリティの学力保障や進路保障という研究関心に合致する学校教育機関と若者支援団体に連絡をとった。学校教育を中心としつつも、英国で進路保障に重要な役割を果たしているユースワークの取り組みについても調査することとした。本調査の趣旨に賛同し、調査結果の公表の了承、写真撮影や録音の許可を得られた学校・機関のみが今回の調査対象となった。結果として、コロナ禍の流行による日本からの渡航制限が緩和された9月頃に、初等教育（小学校）3校、前期中等教育（セカンダリースクール）3校、ユースワーク2団体での調査を行うことができた。

	学校・団体名	所在地	訪問日	該当節
初等教育	Tollgate Primary School	ニューハム	2022/9/16	2 節
	Alderwood Primary School	グリニッジ	2022/9/15	3 節
	Haimo Primary School	グリニッジ	2022/9/15	4 節
中等教育	Lister Community School	ニューハム	2022/9/20	5 節
	La Retraite Roman Catholic Girls' School	ランバス	2022/9/14	6 節
	The Elms Academy	ランバス	2022/9/20	7 節
ユースワーク	Streatham Youth and Community Trust	ランバス	2022/9/16	8 節
	Rathbone Society	ランバス	2022/9/20	8 節

図 1.1：調査対象校・団体一覧

図 1.1 の所在地はロンドン特別区の地名であり、ニューハムは、ロンドン東部の行政区で、そのなかのストラットフォードは 2012 年にロンドン・オリンピックの会場となった場所である。少し古いデータではあるがロンドン評議会 HP に掲載されている情報によると、16 歳未満の割合が 26.2% と少し高く、またブラック及びエスニック・マイノリティが 60.4% と大半を占めている。特に、南アジア系（バングラディッシュ）の移民が多く住んでいる。本初子午線が通っていることで知られるグリニッジは、ニューハムからテムズ川を挟んで南側に位置する。ブラック及びエスニック・マイノリティの割合は 41.3% である。そして、ランバスはロンドン中心部近くのテムズ川の南側のエリアであり、ロンドン最大のウォーターloo 駅を有する。人口密度が第 5 位で、ブラック及びエスニック・マイノリティは 37.6% で、ブラックカリビアンやアフリカンが比較的多い。近年、大

規模な住宅地開発が行われている。

以下では、これらの調査校・団体において関係者へのインタビュー、授業や事業の観察、資料収集等のフィールドワークを行った結果をもとに、各学校・団体の取り組みやその課題を記述することによって、イングランドにおけるマイノリティの子ども・若者に対する様々な支援の様相の一端を描き出す。

2. Tollgate Primary School

2. 1. 学校概要

Tollgate Primary School(以下 TPS)はロンドン東部にあるニューハム区に位置している。ニューハム区は人口約 35 万人で「イーストエンド」と呼ばれる移民労働者集住地域の一角にある (Office for National Statistics 2022)。2011 年時点の国勢調査によるとロンドンでも貧困度の高い地域 (子どもの貧困率 37%) で人口の約 70% がエスニック・マイノリティであり、アジア系が 43.5%、ブラックが 19.6% を占めている (Office for National Statistics 2012)。

TPS では 450 名の児童のうち EAL (第一言語が英語でない) 児童は 65% である。バングラデシ (21%) と東欧系ヨーロッパ人 (17%) が最大のエスニック・グループで、ホワイトブリティッシュ、ブラックアフリカンと続く。宗教はムスリムとクリスチャンがそれぞれ約 40%、FSM 児童は 25%、SEND 児童は 14% である。Ofsted の評価は Outstanding であり (Ofsted 2008)、後述するようにコロナ禍の厳しい状況下においても学力保障を維持していることが特徴的である。学校形態としては 2017 年からアカデミー⁽⁹⁾ になったが、現時点では大きな変化が語られることはなかった。国立の自閉症認定校でロンドンでは自閉症のためのトッププロバイダーの一つとして位置づけられる。当日は、エマ・オコナー氏 (校長)、ジュリー・アン・ジェニングス氏 (家庭支援員)、マーティン・スタンリー氏 (SEND 担当者) が応対してくれた。

2. 2. 学力保障の実態

TPS では学力保障の取り組みにおいて “Diminishing the Difference” (差を縮める) ことが重視されている。ただし成績下位の子どもの学力を上げるだけでなく、中・上位の層にもアプローチしている。イングランドで最も貧しい地域の一つでコロナ禍では家族を亡くした児童が大勢おり、ニューハム区の病院の依頼で空き教室に人工呼吸器や医療機器を置いていた時期もあったという。そのような状況下で 2022 年の夏に実施された全国テスト (SATs) では、読み、書き、算数、文法・句読点・スペリングの全てにおいて全国やニューハム区の平均を上回り、TPS の過去成績を概ね維持した。下記に一例として 6 年生 (キーステージ 2) の読み書き算数を合算した成績を示す。

図 2.1 は約 91% の児童が期待される水準の成績を充たしていることを示し、図 2.2 はより高いレベルの成績をおさめる児童が約 34% いることを示している。他にも 6 年生の文法・句読点・スペリングの成績は期待される水準の児童が約 93%，より高いレベルの児童が 60% と成果が見られた。

🏫 RWM - achieved standard

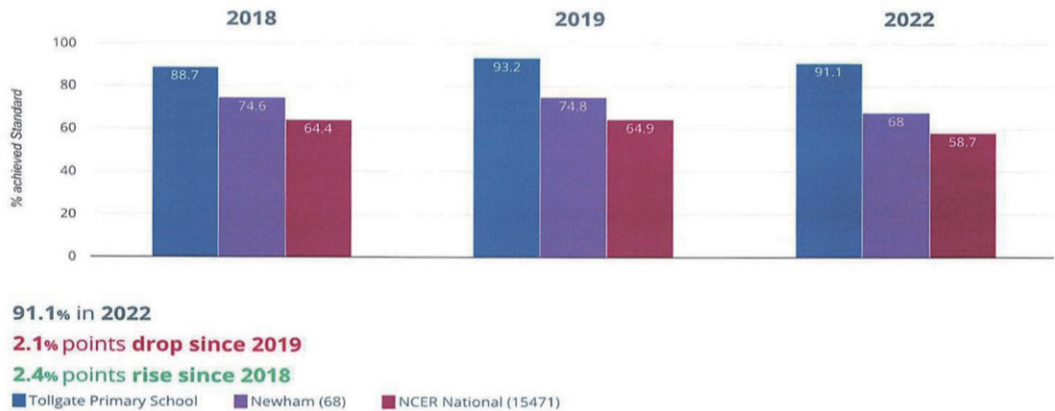


図 2.1：キーステージ 2-RWM の成績（期待される基準を満たした割合）

🏫 RWM - high attainers

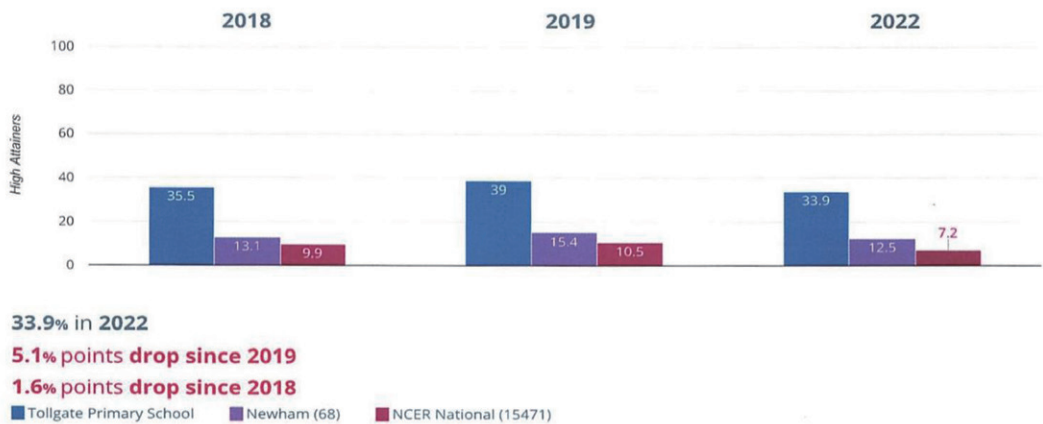


図 2.2：キーステージ 2-RWM の成績（より高いレベルの割合）

特徴的な学力対策としては学習進度の遅れや社会経済的に厳しい背景を持つ「下位 20% の子ども」を意識した教育実践が挙げられる。通常授業では教授内容を分かりやすく伝えるために導入や質問、語彙説明、自主学習時間の確保等の仕方が共有され、児童 1 人に対し 1, 2 人の教師がサポートできる環境が整えられている（Wave 1）。そして授業内容のフォローのため教師や TA 等によ

る介入が行われる。英語・算数・理科の質の高い授業を受けさせる目的から、午前中は通常授業、午後に介入という時間割になる（Wave 2）。さらに指導が必要な場合は、発音、読み、書き、算数といった基礎的学力をつけるために6週間の介入が行われる（Wave 3）。Wave 1～3とは別に、社会的・情緒的なケア（パストラル・ケア）が必要だと判断される場合は会議でそれぞれの子どもにどのような教育支援が必要なのかが議論される。その後、養育、行動、社会的スキルといったプログラムに分かれて各46人のグループで6週間の介入が行われる。以上のような介入は、成績中位層の子どもにも行われるため、たとえば1クラス30人の場合、介入を受ける児童は中位層3名、下位層4名、パストラル・ケア数名がおり、平均クラスの1/3に及ぶ。介入の期間は限定されるため、夏頃までにクラスの2/3が介入を受ける。

ただし、SENDや自閉スペクトラム症の子どもは上記の学力保障の対象となっていないことに留意する必要がある。かれらは年齢ではなく能力に応じて4つのクラス（バンド1～4）に分けられ、10人前後の少人数体制で多い場合は子どもと約同数のサポーターが配属される。TPSでは学習障害専門の教育支援が3年前から行われ、音楽療法、遊戯療法、作業療法、言語療法、感覚統合など専門家による特別カリキュラムでの支援を受けることができる。ただしバンド1の児童を除きかれらはSATsの受験対象者になっていない。

2. 3. コロナ禍以後における教育支援の展開

TPSの児童の親の多くはパブやクラブ、劇場、レストランなどの接客業に従事していたが、コロナ禍の影響下でほとんどが閉鎖され職を失った親もいる。ガスや電気等のエネルギー代が高騰する中で、TPSでは無料昼食や安価な朝食を提供するほか学校をコミュニティのフード・ハブとして位置づけ、食材配布を試みているという。またコロナ禍以後ニューハム区では各学校にメンタルヘルス・スタッフが配置されるようになった。TPSでも同様に配置され、子ども、スタッフ、保護者のウェルビーイングとメンタルヘルスが促進されている。

さらに Tollgate Community Hub が校内に設置された。コロナ禍以前より構想されていたがコロナ禍の影響で2021年9月より遅れてオープンした。ここでは移民の保護者など ESOL（English for Speakers of Other Languages）の人を対象とした英語教室やオンライン安全ワークショップ、低予算で健康的な食事づくりのための料理教室、自閉スペクトラム症の子どもをもつ保護者のための子育て教室、マインドフルネス講座等が開催されている。また無料のコーヒーモーニングの実施は保護者が気軽に学校教員と話せる機会となっている。このような取り組みは、マイノリティ保護者の地域社会からの孤立を予防し社会・学校への参加を促進する、社会教育の役割を果たしていると考えられる。学校は保護者の教育やセーフガード機関等との連携を通してナイフ犯罪や薬物、銃撃等から子どもを守り、コミュニティの安全を確保しようとしているという。

2. 4. 学力保障の広がり と 葛藤

TPS は自校で学力保障の取り組みを進めるだけでなく、近年ロンドン7区にある30校の提携校 (Boleyn Trust Teaching School Alliance) を率いるティーチング・スクールとなり、自校における教育のノウハウを他の学校へと継承する試みを行っている。教授法やリーダーシップ開発を行い、年間30人の小学校教師を養成する取り組みはOfstedでも評価されている。しかし、一方で次のような葛藤も見られる。まずピューピル・プレミアム (児童加配金) の金額が近年大幅に削減されたため、資金繰りが困難である。そしてSENDや自閉スペクトラム症の子どもの学校生活は他の子どもとは交わりにくく、主流な学力保障の対象からも外れていた。特別支援学校でない一般校で障害児教育を行うことは社会的包摂に寄与する一方で、学校内における分断の克服が課題だと言えるだろう。

3. Alderwood Primary School

3.1. Alderwood Primary School の概要

Alderwood Primary School (以下はAlderwoodとする) はグリニッジ区の東南部にあるエルサムに位置しており、2017年に新しく開設された小学校である。児童数が180人程度の小規模校である。2022年のデータによると、AlderwoodのFSMの児童は全校生の55.7%も占めており、イングランドの平均値である22.5% (DfE 2022a) を遥かに超えている。その上に、FSMの基準をギリギリ満たしていないが、生活に苦しんでいる児童がたくさんいる。いわゆる「働く貧困層 (working poor)」が多い (校長談)。また、3人以上の子どもを持っている大家族も多いため、保護者は学校との繋がりが弱い。児童の出席率を改善するために、Alderwoodは児童の家庭への働きかけや支援をも行っている。この点はOfstedにて高く評価されている。AlderwoodはSEND児童への教育支援を積極的に行っている。保護者との繋がりを大切に、定期的な会議、学校のイベントを開催することで、児童の状況をこまめに保護者に伝える実践を行っている。それ以外、Alderwoodはリーディング教育に力を入れているため、児童の読解力が高い。読解能力が比較的低い生徒をしっかりとサポートしている。だが、読解内容が難しく付いていけない児童もいる。Alderwood小学校のOfstedの結果はGoodになっている。

3. 2. 学校側の取り組み

筆者たちの学校における参与観察とインタビュー調査に基づき、Alderwoodで行われた取り組みを、読解教育の徹底、背景を問わないインクルーシブ教育、保護者向けの支援活動の3点で整理した。

前述したように、Alderwoodは、まず、子どもたちの読解教育を徹底的に行っている。フォニッ

クス、ライティング、リーディングといった側面に力を注いでいる。カリキュラムが詳しくデザインされており、保護者と子どもの連動なども強調されている。読解教育に力を入れていることは、学校の廊下で飾られた展示物から読み取れると考えられる。

また、Alderwood はインクルーシブ教育を提供している。SEND 担当者をはじめ、ラーニング・メンター、自閉スペクトラム症専門家、児童早期識字能力トレーナーなど様々な専門家によって包摂チーム (inclusion team) が作られている。

Alderwood では、児童の背景を問わずに、全ての活動やカリキュラムへ参加させる。それ以外、早朝のカフェ時間、放課後のクラブなどにも積極的に参加させるという。

さらに、Alderwood は社会的な不利益に置かれる児童が直面している格差を縮めることを教育の目的の一つとしている。貧困層に置かれる家庭が多いので、Alderwood では保護者むけの生活支援も手厚くされている。たとえば、学校側は冬のエネルギー支援金を提供したり、交通費や燃料費の割引券を提供したりしている。また、学校でフードバンクの商品引換券を受け取ることもできる。さらに、児童の出席率を高めたり遅刻を防いだりするために、Alderwood は早い時間帯に児童向けの朝ごはんを無料で提供している。その中で、特に目立ったのは the Cost of the School Day Project というプロジェクトである。当該するプロジェクトは保護者の経済的負担の減少という目標から発足したものである。具体的には学校のイベントの日では強制的にお金を払うのではなく、任意の寄付形式を採用する。また、エコの名の下で制服をリサイクルする。そして、dress-up day でコスチュームがない児童もいるため、ワークショップを開催し保護者と一緒にコスチュームを作るなど児童や保護者のプライドを傷つけないような形で支援をしている。

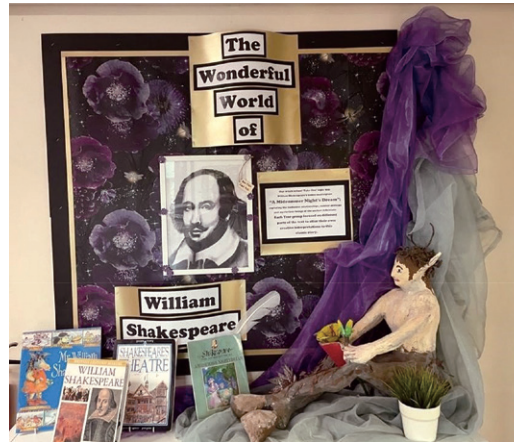


写真 3.1 : 読書に関する展示物

4. Haimo Primary School

4. 1. Haimo Primary School の概要

Haimo Primary School (以下、Haimo) はロンドン南東部に位置するグリニッジ区のエルサムというところにある。児童数は約 360 名の中規模校である。2022 年度時点で、SEN 児童：72 名 (20%)、EAL 児童：121 名 (34%)、FSM 児童：127 名 (35%) となっており、どの数値もイングランド平均よりも高い。EAL の第一言語の内訳は、ルーマニア語 13 名、アルバニア語 10 名、ブルガリア語・スペイン語・ヨルバ語各 7 名で、その他 26 言語にわたる。Ofsted (2018) では

Good の評価を維持しており、長期欠席者の多さ（イングランド平均 8.7% に対して 13.5%）が懸念事項として指摘されていたが、2018/2019 年度は 8.4%、7.7% と改善し、平均よりも少なくなった。

4. 2. 学校の取り組み

イギリスの小学校らしく、校内の掲示が凝っているという印象をまず受けた。なかでも目を引いたものが、Stonewall（チャリティー）のポスター“Different Families Same Love”である（写真 4.1）。「母＋父」の組み合わせだけではなく、シングルマザーの家庭やステップファミリー、社会的養護のもとで暮らす子、同性カップルの親など、いろいろな場合があるが、いずれもかけがえのない家族であり、多様性を重んじているというメッセージが伝わってくる。校長は多文化についても同様だと話した。実際の教員の家族の写真も貼ってあった。また、図書館には新聞紙で作った立体の装飾があり、童話のような世界観であった。これは創作が上手な TA と子どもたちが一緒に作ったそうで、多くの子どもたちのお気に入りとなっている。各教科に関する掲示物もあり、そこには School Curriculum Journey（学年ごとのカリキュラムマップ）も併せて貼ってあり、系統性が意識できるようになっている。包摂的な雰囲気のもと、楽しく、かつ積み重ねを大切に学習することが重要視されているように思われる。

教室は青色（床や椅子）と黄色（壁）を基調とした教室で、電子黒板やホワイトボードを使って授業が行われていた。低学年の教室にはちょっとしたパンと野菜（ミニトマト）があった。あるクラスではフォニックスの授業が行われていた。フォニックスは近年政府主導で取り入れられた英語の読み書きのための学習法である。教員へのインタビューでは、フォニックスは構造的なプログラムになっているため、早いペースでスペリングと発音を身につけることができ、たしかに成果をあげている面があるという。ただし、何人かの子どもたちには合わず、機能しないとも語られた。



写真 4.1：「異なる家族，同じ愛」

Haimo を訪問した理由は、前述の Alderwood と同様に、社会経済的に厳しいグリニッジの学校として、the Cost of the School Day (CPAG⁽¹⁰⁾ のプロジェクト) を受託し、実施していたことが挙げられる。ケイト校長は、the Cost of the School Day プロジェクトを受けたことによる利点を次のように語った。まず、制服等のリサイクル事業をさらに進めることができた。また、CPAG が Haimo の教職員・子ども・保護者へのインタビューをもとに報告書を作成し、それに基づく助言が得られた。さらに、もともとあったアイデアを改善したり、他校とつながって実践を共有できたりした。以上のことを校長として高く評価している。その後、もともとあった朝食クラブを充実させて誰でも朝食をもらえるようにするなどの改革も行われた。

5. Lister Community School

5. 1. 学校概要

Lister Community School (以下、LCS) は2節の TPS と同じニューハム区に位置する。LCS の在籍生徒 1,537 名のうち FSM 生徒は 47.2%、SEND 生徒の割合は 7.6%、EAL 生徒は 56.6% となっている (Office for National Statistics 2020/21)。2021 年からアカデミーになった LCS の Ofsted の評価は、2013 年に Good の評価を得て以降 2018 年も同様の評価を得ている。過去 3 年間の生徒の総合成績が常に全国平均を上回っていること、そして聴覚障害者支援部門があり充実した支援が行われていること等が理由として挙げられている⁽¹¹⁾。最新の GCSEs の結果でも各生徒の学力変化を示す Progress 8 score⁽¹²⁾ が 0.28 ポイント上昇し、英語・数学の標準レベルの達成者が 72%、より高いレベルの達成者が 54% であると示されている (LCS 2022)。人間関係や性と健康に関する教育 (RSHE) が体系立てて行われていることも LCS の特徴の一つである。卒業後はニューハム・シックスフォーム・カレッジやニューハム・カレッジ等に進学する生徒が多い。訪問当日はテッサ・ホール氏 (校長補佐)、サラ・エドワード氏 (生徒支援センター)、ヤスミン・ディラン氏 (学習支援担当) を中心に対応してくれ、生徒支援や学習支援の話を中心に伺った。

5. 2. 学校生活を支える福祉的支援

学校生活を支える福祉的支援の取り組みは大きく 3 点に分かれている。

第一に生徒のウェルビーイングとウェルフェアを支援するためのハウス・チーム制度がある。最上学年を除く全生徒が縦割りの 5 チーム (きょうだいは同じチーム) に分けられる。各チームにはチーム・マネージャーとパストラル・マネージャーが各 1 名配属され、生徒の困りごとへの支援や必要であれば学校内外の専門家との連携が求められている。前者は主に成績表の授与や不登校傾向の生徒の指導や生活指導上の目標設定などを行う。後者は主に行動上の問題や家庭の貧困等に働きかけ、たとえば週 1 回家庭訪問を行ったり遠方に住んでいる生徒の遅延許可証の発行や制服の購入

に問題がある生徒には補助金を出したりする。また最高学年になると受験サポートのための異なる支援が用意され、キャリア・チーム2名を中心になされている。

第二に生徒支援センター（Student Support Center）の働きが挙げられる。社会的、感情的、精神的な課題を抱えた生徒のための場所であり5名のスタッフが配置されている。1度に最大10名の生徒を受け入れ、生徒は授業には参加せず6週間センターにのみ通う（延長の場合もある）。チームメンタリングや保護者との会話を重視しながら学習を継続的に行う。メインストリームに戻しGCSEsの準備をさせることを目標にしているという。

第三に包摂チームの働きが挙げられる。教育ヘルスケア計画（EHCP）の認定を受けた生徒や高機能自閉症やダウン症の生徒が支援対象となり、17名のスタッフのうち聴覚障害の支援者が10名、クラス担任が5名含まれている。支援資金は潤沢ではないため、読解などにおける「介入」を実施しスタッフを増やす代わりにきめ細かな個別支援計画を立てることで、支援の質を担保しているという。医療支援者が教師と連携し医療上のケア、たとえば喘息、血圧、アナフィラキシーへの対応を行うこともある。またメインストリームには入れないが保護者が特別支援学校への通学に反対する生徒や社会情動・メンタルヘルス（SEMH）にニーズがある子どもへの教育支援もこのチーム（Learning Support・SENCO）の役割である。かれらはGCSEsの資格が得られないため、2名の児童保護官を含めたセーフガードチーム、教育心理学者、セラピスト、言語療法士、作業療法士、小児科医と連携しながら個別のカリキュラムを作成している。

5. 3. 小括：学校生活を下支えする個別的支援

LCSでは各生徒がサポーターの大人と個別的な関係を結びやすい学習支援・生活支援体制が構築されていた。人的資源が限られている中で生徒の困難を早期にすくいあげ、他機関との連携のもとで解決し学校生活を持続させようとする工夫がうかがえる。ただし、細分化された個別支援がどのように学力保障とつながるのかについては今回の訪問では分からなかったため今後の課題とした。

6. La Retraite Roman Catholic Girls' School

6. 1. La Retraite Roman Catholic Girls' School の概要

La Retraite Roman Catholic Girls' School（以下、La Retraiteとする）は1880年にフランスの女性教育者によって開校された長い歴史を有する女子校である。セカンダリースクール（前期中等教育相当）とシックス・フォーム（後期中等教育相当）両方を設定している。女子校であるが、シックス・フォームには一部の男子生徒も在籍している。また、当該する学校では信仰と関係なく、全ての生徒を受け入れる方針を持っている。La Retraiteはランベス地域に位置しているが、多くの

生徒はランベス以外の地域に居住している。

La Retraite には、2022 年現在、1,130 名の生徒（11～18 歳の生徒を対象）が在籍している。そのなかで FSM 生徒数は 249 名で、全校生の 29.9%を占めている。2013 年のデータによると、エスニック・マイノリティの生徒の割合が高く、90%も占めている。ブラックアフリカン、ブラックカリビアンとホワイトヨーロッパ系の生徒数が多い。EAL 生徒は全校生の半分以上である。一部の生徒は英語能力が初級レベルである。それにもかかわらず、La Retraite は 2007 年以來、Ofsted の査察結果が outstanding となっている。その中では、セカンダリースクールのパフォーマンスが優れているという。2022 年のデータによると、La Retraite の 82%の生徒は全科目において 4 点以上であり、イングランドの平均値である 73%を 9%上回った。また、シックス・フォームの評価は良好に止まっているが、少しずつ改善されているようだ。近年、La Retraite のシックス・フォームにおいては、T レベル教育に力を入れており、これからの成長が期待される。

6. 2. 学力保障：多岐に渡った充実した生徒支援

La Retraite では、背景を問わずに生徒への支援が手厚く行われている。本節では、フィールド調査結果及び、教職員へのインタビュー調査結果に基づき、La Retraite の支援システムを説明する。

第一に、La Retraite には生徒の安心・安全と深く関わるセーフガーディング・グループが設置されている。当該する支援グループは生徒の学校内外の安全を保障する役割を果たしている。暴力、性暴力によるトラブルの対策や、メンタル、出欠、ヤングケアラーに関係するサポートはセーフガーディング・グループによって提供されている。セーフガーディングとは別のグループであるが、メンタルヘルス・グループも大きな役割を果たしている。親の離婚によるトラウマ、受験のストレスなどといった生徒の心と関係する問題を解消していく。公立学校においては珍しくスクールカウンセラーがフルタイムで働いているため、いつでも相談できる環境が整備されている。この点からいえば、La Retraite の生徒支援が手厚いと見受けられる。また、両グループの支援内容はオーバーラップする場合が多い。組織の運営を円滑にするために、毎週月曜日に全教職員は校内のチャペルに集まり会議が行われる。そこで情報がシェアされる。日頃ではメールなど通して各グループは情報が共有されているという。支援担当者によると、生徒の生活は新型コロナウイルス感染の拡大に影響された。コロナの流行状況によって、試験がキャンセルされたり延期されたりして生徒の中にはストレスが溜まっている。また、家に拘束する時間が長かったため、DV が生じてしまったことも多いという。そこで、支援担当者はロックダウンの間では生徒と電話でコミュニケーションをとってきた。支援担当者たちは生徒にとっていつでも話を聞ける存在となっているようだ。

第二に、La Retraite では生徒のニーズに応じた学習支援も行われている。SEND 生徒向けの学習サポートはその一例である。学習サポートのスタッフはブラックアフリカンの方で情熱を持って自らの教育実践を紹介した。専門企業が開発した教材（例えばリーディング介入レッスン）を利用し、SEND 生徒とのかかわりを大切にしながらリテラシー教育を行っている。支援の担い手である

スタッフには明確なキャリアパスがデザインされている。学習サポートアシスタントやハイレベルTA等異なるレベルの職位がある。彼女はこれから教員免許を取りキャリアの道をさらに拓いていきたいと自分の夢を語っていた。

第三に、La Retraite ではEAL生徒への言語教育にも力を入れている。スペイン語、ポルトガル語、フランス語などがMFL (Modern Foreign Language) で教えられている。EAL生徒はルーツ国の言語授業を受け、単位を獲得していると聞いた。だが、気楽に単位が取れるわけではないという生徒の話もあった。南米出身の生徒は、第一言語であるスペイン語の授業を取ったが、南米で使用されるスペイン語は、スペインで使われるスペイン語と異なっており、苦勞したという。また、La Retraite はEAL向けの英語教育に力を入れている。筆者たちは当該する英語の授業を見学した。

EAL生徒向けの英語教育の教室は少し離れた場所に設置されており、一般の教室よりは暗かった。各国の文化的なグッズが教室内に飾られており、異国情緒が溢れている。担当教員によると、教室が静かな場所に設置されていることや光を控えめにすることで、EAL生徒にとって安心できる環境を構築したかったという。教室には7人程度の受講生がいた。生徒たちの自己紹介によると、スペイン、パリ、ポルトガルなど様々な国から渡英したようである。イングランドでの滞在期間も異なり、3ヶ月から5年までである。

EAL生徒の英語の担当教師は何か国の言語を話せる情熱がある方である。英語だけではなくスペイン語も教えているようだ。スペインルーツの生徒に対して、スペイン語で声をかけたりする様子もあった。担当教師によれば、当該する授業は言語能力発達初期段階、いわゆる英語の初心者だけでなく英語がある程度できるようになった生徒にとっても有益である。また、言語そのものに留まらずに各国の文化を教えている言語教育も実践されている。たとえば、EAL生徒を博物館に連れたりロンドン塔まで遠足したりしている。ストレスを発散するためにガーデニングクラブも主催されている。ただし、EAL生徒の背景が異なっており英語能力のレベルもそれぞれであるため、統一したカリキュラムはないようである。担当教師は常に生徒を一人一人見ながら、会話の練習を行っているという。

このように、La Retraite では、生徒の安全・安心の環境の保障から、生徒の各種のニーズに応じる教育まで、多岐に渡った生徒支援が行われている。

6. 3. 進路指導：大学進学と就職の両立支援

La Retraite のシックス・フォームではTレベルに力が入れている。Tレベルはイングランドが2020年から発足した新しい教育コースで、学力を重要視するAレベルより実践的であると言われている。Tレベルは技能職への就職、関連技術が学べる高等教育への進学を目指すため、産業界のニーズが満たせる形でデザインされている。そのため、Tレベルは企業との連携を大切にしている。教室内の授業のみならず実践的な学習が行われており、3ヶ月の職場でのインターンシップも求められている。La Retraite はTレベルが設立当初から当該する教育コースを学校内に導入し、

Tレベルのパイオニアだと誇りが高い。現段階、デジタル・ビジネス、保育、建設、助産、メディア放送と制作、法律サービスといった6つのコースを設定している。

このように、Tレベルを導入したLa Retraiteでは大学進学と就職の両輪で生徒の進路指導が行われている。進学アドバイザーとビジネス・エンゲージメント・オフィサーは大学への出願、経済的支援、面接の指導を行うとともに、産業界への就職、職場体験、ボランティア活動の支援を行っている。La Retraiteの在校生は、Tレベル教育コースについて以下のようにコメントしている。

自分のキャリアについてゆっくり考えることができている。シックス・フォームでTレベルの課程を2年間学んでから、直接に職場に行くか、それとも大学に行くか、両方選択できる。やり直すこともできる。友達は最初、保育だったが、デジタルに変更した。もう一年やらないといけないが、やりたいことを見つけたし、先生たちにもサポートしてもらっているのだから、本人は満足しているようだ。（2022年9月13日 生徒へのインタビュー調査より）

ただし、実際にTレベルの導入は2年前であるため、調査時に卒業生がまだ出ていない。進路保障の効果について追ってさらなる調査が必要である。

7. The Elms Academy

7. 1. 学校の概要

The Elms Academy（以下、Elms）は、ロンドンのやや南部に位置するランベス区のクラップムというところにある。2004年に市立アカデミーの最初のひとつとして開校した。定員は135名で、学校周辺の高級住宅街の子どもたちは他のエリート校に行っているため、通ってくる生徒は少し離れた地域の地元層である。SEN生徒は13.2%、EAL生徒は46%、FSM生徒は56.8%という割合である。ランベス区のなかでProgress 8（2019）の成績がイングランド平均より高く、かつマイノリティ生徒が多いことから選定した。

7. 2. 学力保障：規律を重視し、学習に集中する環境を作る

Elmsの学校の特徴をひとことで表すなら「規律」重視である。日本の生徒指導に力を入れている中学校を思い浮かべてもらうとよい。以下では、訪問日の様子を紹介する。毎朝8:25から、雨の日も校庭でクラスごとに朝礼が行われる（写真7.1）。2列に並んだ生徒たちに対し、各クラス担任がその日の伝達事項を共有し、服装・身だしなみのチェックを行い、忘れ物の申告を受け付ける。その後、各クラスに移動して、8:40からチュータータイムがある。訪問日は学校生活の規律に関する校長の講話がテレビ中継で行われていた。眠そうにしている生徒に対して、先生はぴしゃ

りと「起きなさい」と言う。講話のあと、生徒のふるまい (behavior) ポイントの週間ランキングが発表された。1位の生徒には金券が昼休みに授与されるという。ふるまいポイントは、授業中の態度等が merit もしくは warning として評価され、先生が集計している。

教室には、正面に大きな電子黒板があり、そこをメインに授業が行われる。生徒は2人がけの木製の広めの机に座る。制服の着用方法や礼儀も厳しく定められ、余計なものを持ちこまないよう指導され、ペンケースは透明なものに統一されている。教員の服装はいわゆるオフィスカジュアルが多いが、Behavior (≒生活指導) 担当のジョン副校長



写真 7.1 : Line Up

はジャージ姿である。テオ教頭 (格差是正担当) によると、Elms は若い教員が多く、放課後の補習にも熱心に関わる。また、毎週火曜日の16～18時に職員会議を行うほか、ユニテッド・ラーニングというトラスト (学校群) に所属し、他校とパートナーシップを結んで教員の能力開発にも取り組んでいる。

これらは、不利な背景を持つ生徒が、学習を通して自分自身で将来を変化させるための取り組みである。そのために教師は生徒に対して高い期待を持ち、学習に集中するための支援を惜しまない。7:30～8:15には朝食クラブがあり、早く学校に来れば誰でも朝食を無料でもらうことができる。また、放課後に (試験前の学年は朝にも) 宿題クラブが実施され、家庭で宿題を行えない生徒のために場所が提供されている。さらに、コロナ禍による学校閉鎖時には、各生徒にモバイル PC を譲渡したという。

7. 3. 進路保障：進学を通じて将来を変える

教員のインタビューからは、上で見たような取り組みを通じて学校で学力をつけ、生徒が自分の出自によらず将来を自由に選択できるようにすることが最大の目的とされていることが伺われた。その動きが強まってきたのが、現管理職のエイミー校長・レオン上級校長の体制となった4年前からである。2022年9月にLambeth Academyから名称変更を行い、進学校としてのブランディングを進めようとしている最中である。附属のシックス・フォームの生徒の40%が、イギリスの名門大学群ラッセル・グループの大学に進学していることが学校ホームページに記載され、2021年度にオックスフォード大学とケンブリッジ大学に1名ずつ合格したことが学校の複数個所で喧伝されていた。2020年度のセカンダリー卒業生のうち、継続教育機関に30%、附属のシックス・フォームに53%、シックス・フォーム・カレッジに7%進学している。シックス・フォームへの進学率はイングランド平均が38%であることを鑑みると高い数値だが、今後の学校の課題としてエイミー校長はさらなる成績向上とシックス・フォームへの進学者を増やすことを挙げた。一方、レオン上

級校長は生徒たちの様々な文化的体験の機会（旅行等）を確保することを挙げた。

8. ユースワークのとりくみ

8. 1. ふたつの団体について

ユースワークとはなにか。それは子ども・若者の個人的、文化的、社会的な発達をたすけるためのさまざまな場面でのノンフォーマルまたはインフォーマルな教育プロセスをさす。子どもたちにとってユースワークは学校や家庭につぐ第三の社会であり、そして学校から（ときには家庭からも）排除されがちなマイノリティにとって、それは社会へと参画するためのよりどころでもあり救済でもある。日本の社会教育はよわく局所的にしか存在しないが、イングランドはユースワークの本場であり（あった）労働党政権時代までは地方当局にもユースワーカーがおおくいた。

今回の9月の訪問では2ヶ所のチャリティを訪問しユースワークの現場を見聞した。ひとつめの団体はStreatham Youth and Community Trust（以下SYCT）、もうひとつの団体はRathbone Society（以下RS）という。ともにランベス区を拠点として活動をおこなっており、ともにランベス地方当局の若者むけのプロジェクトである就労支援事業を受託している（ハヤシザキほか2023）。

ひとつめの団体SYCTは1946年にボーイズクラブとして設立された。0歳から24歳までを対象に、さまざまなユースクラブ（ジュニア～シニア、特別支援、朝食クラブ、宿題クラブ、スポーツクラブ）などを運営する。ミッションは「ストリートハムのすべての子どもがその可能性のすべてをひらくこと」である。すでに70年にわたってストリートハムで活動してきたため、世代をこえてコミュニティとふかくつながっているという。

ふたつめの団体のRSは1967年の設立。ダウン症の子どもをもつ親たちによって設立された。設立以来、学習障害の子ども、そして、それ以外の子どもの支援をつづけている。通常のユースクラブ（宿題クラブ、特別支援サービス、夏休みの活動など）のほか、また昼間には高齢者のソーシャルケアサービスも運営している。ミッションは「学習障害のある人々が安全で健康で充実した生活をいとなめるようにすること」である。

8. 2. ユースワークの現場をチラ見！

ふたつの団体の見学記をみじかくしるす。

SYCのオフィスのひとつを訪問し、ジュニアクラブの時間帯にあわせてCEOのアンジーに話をきいた。玄関をあけるとバスケットコートがあり、バスケットをするものたちがいた。コートの外でも子どもたちがはしりまわっていた。別室では絵を描いているものたちもいた。美術室なのだろう。陶芸につかうでかい炉がまず目をひいた。絵の具でカラフルによごれた一枚板の長机も。いいよご

れ具合。おもう存分によごせるよなあ。いまイングランドの小中学校では絵をかいったり体うごかしたりする時間が減少している。経済的にきびしい学校ではあえてそれらに力をいれる学校もあるが、一般的には小学校では英数が、セカンダリーでも GCSEs の科目がより重視される。反対にユースワークではホーリスティック・アプローチという言葉がよくきかれる。

まずアンジーがのべたのは「SYCT の子どもたちは生活がきびしい子がおおい」ということだ。SYCT には「オープンポリシーがあって誰でもうけいれる」のだが、ソーシャルワーカーや学校関係者などの紹介でくる子どもがおおいために、どうしても経済的にきびしかったり家庭環境がきびしかったりする子がおおくなるのだという。

子どもたちがあつまるところにはスタッフがついている。子どもたちはめいめいやりたいことをしているが、スタッフの方は一緒にあそびながら必要なときに子どもをサポートしている。鼻にピアスをつけたタトゥーの若い女性はまだ大学生だという。かっこいい。アンジーに「なぜユースワーカーにはファンキーな外見の人がおおいのか？」とたずねたところ「それがすきなんでしょ」とだけ返事が。ユースワークは自由だ。彼女はイーストロンドン大学の学生とのこと。イーストロンドンのみならず、イギリスの大学ではユースワークを専門に勉強できるコースがありユースワークの修士号 (MA) もとれる。もうひとり青年に声をかけたところスタッフではなくかつてのメンバーだった。子どもの頃から SYCT のユースクラブにかよい、里がえりのさいに SYCT にくるのだという。その姿はスタッフさながらで、子どもたちに自然に注意でき信頼をえているようにみえた。年齢をこえた縦のつながりもユースワークの魅力かもしれない。

ビリヤードのプールがあり、たくさんのボードゲームがあった。ソファにすわると壁一面にはいつかかつての写真が目にはいる。アンジーが「この子がいまここのベテランスタッフで……」とモノクロの写真をさしておしえてくれた。ローマとおもわしき場所の集合写真もあった。イギリスの学校では特別な機会がないかぎり (定期的には) 子どもは旅行やキャンプにつれていかない。宿泊行事を子どもが体験できるのは、ホリデーをたのしめる家庭かユースワークの行事のみでなのである。

もうひとつのチャリティである RS への訪問はほんの短時間となった。RS のオフィスと活動場所は 1888 年建造のオールドライブラリーとよばれる (区の図書館だった) 建物だ。建物にはいると受付窓口と左横にはキッチンカウンターがある。そこではスタッフが若者たちむけのスナック菓子や軽食の準備をしていた。その前にはサッカーゲームのプール。フレンズのチャンドラーの部屋にある棒をくるくるまわすアレだ。入口から右にはラウンジとよばれる部屋。どでかい画面の TV モニターとソファ。楽屋にあるかのようなバルブがたくさん鏡のまわりについた化粧台が 2 台。女子のおきにいりだが芝居やハロウィン用だとのこと。そこにもちいさなキッチンがあるが現在は寄付された食料の箱でうまっていた。食料はコロナ禍で若者や高齢者たちが孤立しコミュニティが減収等してくるしんでいたときに配布や配達をおこなったものだという。

奥には広い空間と卓球台。以前に昼にきたときは高齢者のあつまりがここでおこなわれていた。

ひとりですまらなそうにしていた子に卓球でもやるかとさそってみる。1ゲームだったが筆者ハヤシザキが接戦で見事に敗退した（写真8.1）。

さらに別の部屋にはなんと録音スタジオが。若者たちがここで作曲や録音や動画作成をするのだそうである。若者のグループがさっそくYouTubeでラップのようなノリのいい音楽を大音量でならしはじめた。



写真8.1：RSで卓球をする若者と筆者

若者たちのなかには「やはり発達障害だろ

う」とおもわれる子たちがおおかった。ユースクラブ責任者のシャーリーンには「かれらにぜひ話しかけてほしい。最初はヨソヨソしいかもしれないけど、みんないい子たちばかり」といわれていた。話をしてみようとちかづくものの、やばい。会話がむずかしい。視線をあわせてくれない。うまく会話できない状態で時間がすぎる。そうだ、ここは高齢のオッサンよりも年齢のちかい女性たちのほうが相手をしてもらえるのではないかと共同研究者たちに視線をむけてみると誰も若者ともスタッフともしゃべりをしていないではないか。そんな若者でもユースワーカーたちはうまくかかわっていく。あそびのリーダーであるかのように、おもしろくすこし高度なことを提案し、ただのダラダラとした時間におわらせない。さすがプロだなとかんじざるをえない。最終日の「つかれ」をいいわけに、うまい会話をひきだせなかった敗北感をもってそそくさとRSをあとにしたのだった。

8.3. ユースワークの政策動向と現場の実態

連立政権になってから地方当局への交付金が削減され、地方当局はすくない予算での運営をしいられている。その犠牲になったのが学校以外の支援サービスである。具体的には、チルドレンズセンター、ユースワーク、プレイパークなどのきめこまかな子どもサービス・保護者サービスがそれにあたる。

図8.2のグラフはイングランドの全地方当局におけるユースサービスへの実質的な支出の推移をあらわしている（YMCA 2022, p.4）。2010/11年度から2020/21年度までの10年間で、ユースサービスにつかわれた支出は14.8億ポンドから3.8億ポンドへと減少した。74%もの削減である。とくに連立政権が発足した2011/12年度は27%の削減と最大、保守党政権が誕生した2016年は17%と2番におおきな削減となっている。そのごも数%ずつ段階的な削減がつづいている。

SYCTのCEOであるアンジーはこの困難にどのように対処しているのか。「地方当局からの支出は全体的には削減されている。けれども資金調達にはわたしは成功しているほうだとおもう」とのこと。SYCTの2020/21年度の年間収入は約61万ポンド（≒約1億円）。この額は2016/17年

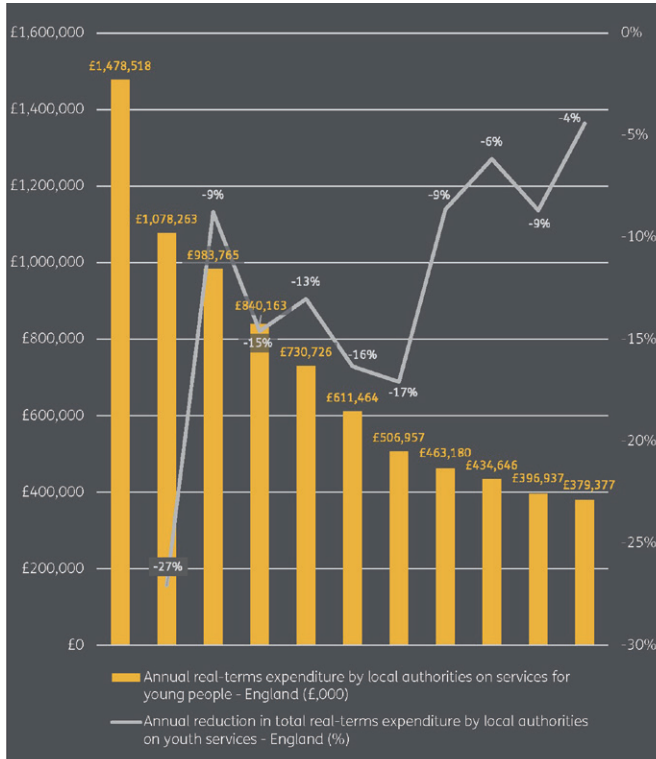


図 8.2：2010/11 年度から 2020/21 年度までの地方当局全体のユースサービスへの支出の推移（YMCA 2022 p.4）

度の約 40 万ポンドよりも 1.5 倍にふえている⁽¹³⁾。アンジーは地方当局や財団の助成金への応募申請に自信を持っている。「書類をかくことがわたしの仕事」「いつも資金の提供先をさがしている」という。また所有のサッカー場をかしだすことや、オフィスの一部の道場をテコンドークラブにも賃貸している。歴史あるチャリティであるだけに不動産資産を有効に活用した自主財源もっているのだ。

他方で RS のほうは苦境を経験した。2016 年にチャリティは財政危機におちいり約 24 万ポンドの赤字となった。2017 年には 14% の支出削減をしいられスタッフのリストラもおこなっている。しかし現在は高齢者のソーシャルケア事業が主力となり、

行政の事業委託がチャリティの安定財源となっている。2020/21 年度の年間収入は約 209 万ポンド（≒約 3.3 億円）だがそのうち約 130 万ポンドが高齢者ソーシャルケアによるものである。

RS のユースワーカーのスニクからは行政の補助金の削減についてなげく声もきかれた。昔は子どもたちをドイツや南アフリカにもつれていくことができたが、もうそんなことはとてもできない。さみしいと。「けど、障害をもっていたり家庭がきびしかったりする、そんな子どもたちにこそほんとは旅行が必要なんだ」とスニクはのべた。どちらも家族旅行の経験がすくないからなのだという。

YMCA（2022）の報告書によればユースサービスの予算がゼロの地方当局もある。そしてユースワークのみでやってきたチャリティのなかには消滅してしまったところもすくなくない。しかしランバス区のこのふたつのチャリティはいきのこった。行政の支出削減に影響されながらも、しぶとく財源をみいだしていた。

8. 4. ユーワークは変化をうみだせる

ウェブサイトからたどれる SYCT の紹介動画には 2 人のブラックの若者がでてくる⁽¹⁴⁾。「キャラバンで旅行にいったよ。よくおぼえている」「2 人のマークがたすけてくれた。オレはすこし荒

れてたからね。ここにきたら落ちついて、サッカーをしたり、プレーステーションをしたり。それで落ちついたのもあるよ。ただただ楽しかった」「大きい方のマークが自分がこまった時になんでもしてくれた。ユースクラブの外であっても。ポジティブな影響をもらったとおもうよ」「子どもたちはストリートで悪の影響にさらされやすいとおもう。(おなじあそぶのでも)ここはポジティブな道だとおもう。みんな友だちだし、一緒に活動して、べつの地区からも人がきて」

まさにこれである。ふたりのトークはマイノリティの社会的包摂にかかわるユースワークの貢献について明確なケースをみせてくれている。よりそってくれる大人がいるということ。そして仲間がいるということ。この場所にきて遊んでいただけではあるが、ふりかえってみると、ユースワークの効果や意味があったことをかれらはわかっている。

アンジーはSYCT自体に財政的な困難はないとはいえ、政府には不満をもっていた。「政府や社会はソーシャルワークの重要性をもっと認識すべき」だと。社会はユースワークを無視するべきではない。「ユースワークは絶対にちがいをうみだすことができる」のだと。わたしもおおいに同意するところだ。イギリスのユースワークには手本であってほしい。

9. まとめ

9. 1. 訪問先の印象

ここまでおよそ訪問先ごとにインタビューや観察でえられたデータからマイノリティの支援のシステムや實際をまとめてきた。各校ともそれぞれに学力・進路保障についてすぐれた実践をみたが、すくない紙幅でまとめると十全につたえることができなにかんじる。この項では印象にのこった学校、機関についてハヤシザキの観点からひとことつけくわえたい。

まず La Retraite の好印象について。La Retraite にはまる 1 日滞在した。ランベス区とはいえカトリックの女子校とは、お嬢様学校なのではないかともいぶかしたが、そうではなかった。きびしい環境の生徒たちもおおくいて、その手あつくきめこまかい支援についてつぎつぎにスタッフから説明をうけ、圧倒された。セーフガーディングチームやメンターの仕事ぶりがすごく、それぞれが多様な子どもたちのニーズにおおくの専門家やスタッフと協働しておうじていた。校長のリーダーシップについても教員たちがくちぐちにほめちぎっていた。生徒たちが校内を案内してくれたのもかれらのすばらしさをしれた。校長は「学力はじつは重要課題ではない。もっとも大切なのは生徒のウェルビーイング」だという。そのエートスは学校全体に浸透していた。研究代表者の志水宏吉も同行していたが、そこが気に入ったのか「ええ学校やわ」ともらしていた。わたしもそうかんじた。

次に強烈な印象をうけたのが Tollgate である。この小学校はすでにハヤシザキに紹介されているし (ハヤシザキ・岩槻 2015)、当時からチルドレンズセンターを併設し、包括的な子どもや保

護者の支援が素晴らしい学校であった。10年前から生活のきびしい子どもの学力保障に顕著な実績をのこしていたが、今回みせていただいた結果には仰天というほかなかった。瀬戸が先の節でしめした6年生の読み書き算数を合算した数値でいえば、全国の児童が58.7%の通過率であるのにたいし、ニューハム区の児童の通過率は68%であった。さすがニューハム区だとおもうところ、Tollgateの子どもの通過率はなんと91.1%であったのだ。これは期待される水準の点数をとっている児童の割合をしめしている。すなわち平均点がたかいということとはちがう。これこそが学力保障のめざすところだといえる。他の学年ものきなみ同様の学力保障がされていた。しかもEAL児童が65%そしてFSM児童が25%である状況において驚異的というほかない。

印象ついでに街の様子にふれておきたい。ロンドンはいまなお現在も開発がすすみ、かつて貧しかった地域に高層マンションや商業ビルがどんどんと建設されているようだった。こうした開発によって地方当局が財政的にうるおいその資金がランベス区の若者の就労支援にながれていることはすでに指摘されたが（ハヤシザキほか 2023）、街の風景さえかつてとはちがってみえた。かつてのブリクストン駅は物騒ですこしきたなく、しかし乱雑さがたのしい印象があった。まだ昼にあるいたときにはカリビアンのおじさんたちがこっそりヘロインを手わたしているのを目撃してしまったり（ほかの共同研究者は気づいてなかった）、夕方になるとどこからともなくレゲエがながれてきたりしてワケもなくたのしい気分になる。しかしまではキレイに整備されたり、おなじみの量販店やオシャレな店があったりもしてよくもわるくも標準化した街にみえた。ほかの駅周辺でも同様のことをおもった。わたしたちはテムズ川南部のランベス区を調査地の候補としたのはブラック系がおおいからであった。その街がかわっているのを肌でかんじた。

9. 2. コロナ禍後の学力保障のゆくえ

最新の2022年の資格試験の結果がでているので参照しよう。図9.1はメインの6つのエスニシティ別にGCSEsの英数の通過率をみたものである。ここではグレード5以上がその期待される水準となる。さらにFSM生徒とそうでない生徒とをクロスしているものだ。2022年のGCSEsは3年ぶりにペーパー試験が復活した。コロナ禍にあった2020と2021の試験は教員のみとりによるも

	2018/19			2019/20			2020/21			2021/22		
	全体	FSM生徒	FSM以外	全体	FSM生徒	FSM以外	全体	FSM生徒	FSM以外	全体	FSM生徒	FSM以外
アジア	51.9%	37.2%	54.7%	58.3%	43.4%	61.3%	60.6%	45.2%	64.5%	61.3%	46.3%	65.3%
ブラック	37.8%	28.0%	40.7%	46.0%	35.4%	49.5%	48.9%	38.7%	53.1%	49.2%	39.6%	53.8%
中華系	76.3%	69.2%	76.8%	79.6%	72.9%	80.2%	83.8%	79.6%	84.2%	79.9%	69.8%	80.8%
ミックス	43.8%	24.0%	48.8%	50.2%	29.8%	55.8%	51.5%	31.6%	58.3%	49.7%	30.7%	57.2%
ホワイト	42.4%	18.1%	45.8%	49.1%	23.2%	53.4%	50.9%	25.0%	56.2%	47.7%	22.3%	53.6%
その他	43.4%	34.0%	46.5%	50.5%	39.4%	54.5%	53.1%	42.2%	58.1%	51.9%	40.8%	57.8%
無回答	35.1%	22.0%	37.3%	38.2%	26.5%	40.3%	43.0%	29.1%	46.5%	42.0%	28.6%	45.7%
全体	43.2%	22.5%	46.6%	49.9%	27.8%	54.0%	51.90%	29.9%	57.0%	49.6%	28.3%	55.2%

図 9.1：属性別 GCSEs 英数でグレード 5 以上の割合の推移（DfE 2022c より筆者作成）

のだったので、それらとの今年の結果との正確な比較はできないとされている。

そこでコロナ禍以前の2019年と2022年の結果をくらべてみると2022年のほうが全体的に通過率がよくでていることがわかる。これは学力があがったのか試験が簡単になったのかはさだかではない（GCSEsの欠陥とされる）。ただブラックの通過率の上昇傾向には着目してよいだろう。とくにFSM生徒に目をむけたい。2019年のGCSEsでわずか28.0%だったブラックのFSM生徒の通過率は2022年には39.6%となっている。11.6ポイントも上昇しているのだ。他方でホワイトのFSM生徒の通過率は2019年に18.1%だったものが2022年には22.3%と4.2ポイントの上昇にとどまる。

視認性をたかめるために上記の表のうちFSM生徒のみとりだし、そのたと無回答のエスニシティをのぞいたグラフが図9.2となる。人数がすくない中華系がダントツで学力がたかいのだが、ブラックおよびアジア系（おもにインディアンとパキスタンとバングラーディッシ）の劇的な上昇が確認できるだろう。そして全体的にマイノリティとされるエスニシティよりもマジョリティであるホワイトの貧困層があえいでいることもわかる。ホワイト-FSM生徒-男子の学力が

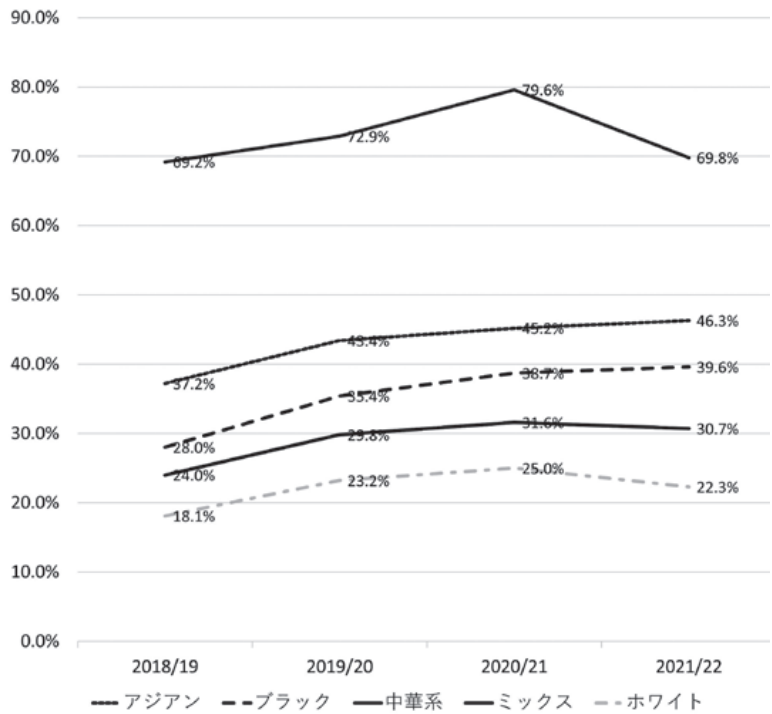


図9.2：図9.1の通過率についてFSM生徒のみの推移グラフ

今のイングランドではもっともひどいことは近年さかんに指摘されているところだ。いうまでもなく移民は都市におおくブラックやアジア系もその例外ではない。イングランドにおける格差問題はエスニシティ間の問題というよりも、都市と地方という都鄙格差として編成されてきたといえるかもしれない。長年きびしいエスニシティだと認識されてきたアフリカンやカリビアンがいまやホワイトよりも学力が保障されており、その差を拡大しつつあるのである。もっともFSM生徒の割合は、ブラックが32.3%であるのにたいしてホワイトは18.7%でしかない（DfE 2022c）。つまりブラックのほうがよりきびしい生活をしているということには留意しなければならないが。

いずれにせよ、わたしたちが訪問してきた学校や団体をみるかぎりブラックとアジア系の上昇と

いう 2022 年のあたらしい結果は十分に納得がいくものであったといえる。かれらの努力はイングランド全体での成果へとつながっているのではないか。行政関係者、学校関係者、そしてユースワーカーやチャリティの運営者、そして親たちやコミュニティという子どもをとりまく人々の日々の地道なひとつひとつのこころみが、長年の積みかさねをへて、いまむくわれている。そうおもいたい。保守党政府の塩対応にはほとんどあきれざるばかりだが、かれらの熱意とその努力には敬意と賛辞をおくりたい。

謝辞および付記

調査にご協力いただいた学校・団体の関係者のみなさまに感謝申し上げます。なお本稿は科学研究費補助金（研究代表者：志水宏吉，課題番号：A20H00100）の助成による研究成果の一部である。

注

- (1) 大阪大学大学院
- (2) 大阪大学
- (3) 福岡教育大学
- (4) 本稿では、イングランドを主に扱うが、「英国」とする場合はブリテッシュ、連合王国（United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland）を指している。
- (5) 1・4・7 節は山口，2・5 節は瀬戸，3・6 節は王，8・9 節はハヤシザキが執筆を担当した。
- (6) そもそもは同和教育から発展してきた考え方であり、通常の意味での学力（＝点数学力）と自らが置かれた被差別の立場を自覚し、差別に立ち向かう主体として自らを形成するという 2 つの要素を含む（志水 2020, p.42）。ただし、本稿の「学力」は後者を含んでいない。
- (7) 同和教育発祥のことばであり、「基礎学力の保障，勤労観の形成や生き方の探究，就職差別の撤廃など様々な取組の積み重ね」（高田 2019, p.167）が含意されているが、本稿では単に次の学校段階等への移行を指す場合もある。
- (8) 2020 年度と 2021 年度はコロナ禍の影響により、試験は中止された。
- (9) アカデミーとは、地方当局（Local Authority）から離脱して、教育省と直接契約を結ぶ学校経営形態をとる学校のことである。
- (10) Child Poverty Action Group は「子どもの貧困」に課題意識を持ち、調査研究、行政府や学校への働きかけ、保護者の相談支援や支援者のトレーニングなどの活動を行っている英国のチャリティ団体である。詳しくは、ハヤシザキほか(2023)を参照のこと。
- (11) LCS の聴覚障害者支援に関する詳細は、ハヤシザキほか(2022)を参照のこと。
- (12) キーステージ 2（小学校高学年）からキーステージ 4（中学校後半）の終わりまでのあいだに、どの程度進歩したかをはかるスコア。英語、数学など最大 8 科目の成績に基づく。
- (13) SYCT と RS の年間支出入の推移はチャリティ委員会のデータベースによる。<https://www.gov.uk/government/organisations/charity-commission> 参照。
- (14) James Taylor, 2020, *SYCT: Past and Present* available at <https://youtu.be/T7krhvIC3QA> [last accessed on 18th Jan 2023].

文献

Department for Education, 2022a, *Academic year 2021/22 Schools, pupils and their characteristics*, available at <https://explore-education-statistics.service.gov.uk/find-statistics/school-pupils-and-their-characteristics> [last accessed on 19th Jan

- 2023].
- Department for Education, 2022b, *Special educational needs and disability*, available at https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/1082518/Special_educational_needs_publication_June_2022.pdf [last accessed on 20th Jan 2023].
- Department for Education, 2022c, *Academic Year 2021/22 Key stage 4 performance*, available at <https://explore-education-statistics.service.gov.uk/find-statistics/key-stage-4-performance-revised/2021-22> [last accessed on 20th Jan 2023].
- GOV.UK, 2022, *Population of England and Wales*, available at <https://www.ethnicity-facts-figures.service.gov.uk/uk-population-by-ethnicity/national-and-regional-populations/population-of-england-and-wales/latest> [last accessed on 20th Jan 2023].
- ハヤシザキカズヒコ・岩槻知也, 2015, 「イギリス 疑似市場化のなかの格差是正」志水宏吉・山田哲也『学力格差是正策の国際比較』岩波書店, pp.89-119.
- ハヤシザキカズヒコ・栗原和樹・山口真美・石川結加・王一瓊, 2022, 「連立政権以降のイングランドの教育政策における排除と包摂」『令和3年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果・報告書 学校システムにおける排除と包摂に関する教育社会学的研究』, pp.113-144.
- ハヤシザキカズヒコ・栗原和樹・王一瓊・石川結加, 2023, 「イングランドにおけるソーシャルインクルージョン」『福岡教育大学紀要』(近刊)。
- 菊地かおり, 2021, 「イギリスにおける早期離学への対応とニートへの支援」園山大祐『学校を離れる若者たち』ナカニシヤ出版, pp.56-69.
- Lister Community School, 2022, *GCSE Result*, available at <https://lister.newham.sch.uk/our-schools/exam-data/> [last accessed on 19th Jan 2023].
- Office for National Statistics, 2012, *2011 Census*, available at <https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/populationandmigration/populationestimates/datasets/2011censuskeystatisticsforlocalauthoritiesinenglandandwales> [last accessed on 19th Jan 2023].
- Office for National Statistics, 2020/21, *Lister Community School Pupil population in 2021/2022*, available at <https://www.find-school-performance-data.service.gov.uk/school/148902/lister-community-school/absence-and-pupil-population> [last accessed on 19th Jan 2023].
- Office for National Statistics, 2022, *2021 Census*, available at <https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/populationandmigration/populationestimates/bulletins/populationandhouseholdestimateswales/census2021> [last accessed on 19th Jan 2023].
- 志水宏吉, 2020, 『学力格差を克服する』筑摩書房。
- 志水宏吉, 2022, 「教育における排除と包摂」『令和3年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果・報告書 学校システムにおける排除と包摂に関する教育社会学的研究』, pp.3-17.
- 志水宏吉・高田一宏・堀家由妃代・山本晃輔, 2014, 「マイノリティと教育」『教育社会学研究』第95巻, pp.133-170.
- 高田一宏, 2019, 『ウェルビーイングを実現する学力保障』大阪大学出版会。
- 植田みどり, 2022, 「社会経済的な格差是正を目指したコロナ禍における学校の取り組み」園山大祐・辻野けんま『コロナ禍に世界の学校はどう向き合ったのか』東洋館出版, pp.238-253.
- YMCA, 2022, *Devalued: A Decade of Cuts to Youth Service*, available at <https://www.ymca.org.uk/wp-content/uploads/2022/02/ymca-devalued-2022.pdf> [last accessed on 19th Jan 2023].